
「蒼の背中」

みくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「蒼の背中」

【Nコード】

N1461I

【作者名】

みくも

【あらすじ】

奇跡の様な双子たちに出会ってしまったアスル。

彼は何よりも二人を愛したが、彼らはどちらか一方の命を選べと迫った。

（前書き）

この作品はすべて架空のものです。

実際の人物、団体名称などには一切関わりありません。

直接的なものではありませんが、殺人に関する描写が含まれます。
ご注意ください。

さあ、どちらを選ぶ？

オレにその選択を迫ったのは、美しい双子たちだった。彼らはいっただって一緒にいて、いっただって同じだった。

まるでひとつの魂を共有でもしてるかの様に、完璧な一対。

姿も声も、その声が紡ぐ言葉さえピタリと一緒。互いを見詰める瞳の動きまで、鏡に映した影の様だ。

オレはそれを、うつとりと眺める。

そうすべきでは、なかったのかも知れないけれど。

「アスル」

名前を呼ばれて、オレは頬杖から頭を上げた。

双子たちはいつもの様に部屋の隅で椅子に腰掛け、少し笑ってこちらを見ていた。慌てて席を立ち、声に近付く。

「教えて欲しいんだ、アスル」

双子が言う。

いや、彼らのどちらかがそう声にした。

けれども不思議な事に、それは二人が言ったのだといつもオレは思い込んだ。

二人のどちらかが椅子を引き、自分たちの間に置いた。くすぐったいものを感じながら、促されるまま双子に挟まれて腰掛ける。

「教えてくれないか」

これは左右から、不思議に重なる声で聞いた。

「でも、何を？」

頼られる事は嬉しかったが、オレが彼らより知っている事なんてないと思う。

「君たちは、オレよりずっと賢いじゃないか」

双子たちが、互いの視線を絡ませる。

その後で、二本の腕がオレの髪をぐしゃぐしゃに掻き混ぜた。彼らはどうしてだか、オレのぐわぐわの頭をよく撫でた。

「アスルでないとダメなんだよ」

「他の人には決められないんだ」

間近で投げかけられる酷く優しい、とろけそうな微笑みに、オレはものを考えられなくなってコクコクと頷く。熱くなった頬を手の甲で押さえると、左右から密かな笑い声がした。

「さあ、決めてくれ。アスル」

「僕たちは、一体どちらが死ねばいい？」

双子たちは柔らかに笑ったまま、そよ風のような声で、オレの胸をギザギザに裂いた。

昔、年の離れた兄がいた。

どんな人間だったか、もうよく思い出せない。

善良とも言い難いが、悪人と言うふうでもなかったのだと思う。

兄が死んで、何人かは泣いた。

殺したのは、双子たちだ。

理由は知らない。覚えているのは、血塗れで倒れた兄。それを足元に見下ろしながら、血染めのナイフを持った彼。

兄を刺し殺した彼と、そうではないもう一人。

一方は血でぬめる手とナイフの感触に顔をしかめ、同じに不快な表情で返り血を拭ってやるもう一人。

まるで奇妙な悪夢の様だ。そう思った。

やがて粗末な家から飛び出してきた母が、小さな子供でも守る様にオレを抱きしめた。とうに父の背丈を越したこの身体を、必死に腕の中に納めようとしている。戸惑って、その母を見下ろす。

父は、母とオレを背に庇って立ちほだかり、ぶるぶると震えながら双子を罵った。

父の怒りを、しかし彼らは理解しなかった。

ただ煩そうに冷たい眼を向け、それから何かを耳打ちしあう。

双子たちは四つの眼で父を見、母を見、そしてオレを見て、笑った。

くすぐる様な眼だった。

オレはそれを、激しく愛した。

血を分けた肉親より、女を抱いた甘さより、抗い難い衝動で。

双子たちは椅子から立ち上がって、ぼうつと考え込んだオレを見下ろしていた。

「さあ、選んで」

彼らは迫る。選び様のない選択を。

「何を選べと言った」

「簡単な事だよ」

「分ければいい」

二つの顔がクスリと笑う。

「愚かなアスル。兄を殺されたと言うのに、僕たちを愛したね」

「その愛情と憎しみを、僕たちの一方ずつに分ければいいんだ」

「憎しみなんかない」

「あるさ」

あるのだろうか。

この双子たちよりも、顔すらよく思い出せない兄の方が大事ななんて事が？

ただ血が同じと言うだけで。

「どうして、そんな事を言った。どうして、君たちのどちらかが死ななくてはならないんだ」

「僕たちは、二人で一人なんだ」

知ってる。

何よりもつながりの強い、完璧な二人。

「ひとつの魂を二人で分ける事はできないんだよ、アスル」

そんな事はあるはずがない。

今までだって、ちゃんとうまく行ってたじゃないか。

彼らは、長い息を吐いた。

「疲れてしまったんだ」

「僕たちは同じであって、同じでない」

「誰も僕たちを見分けない」

「全く同じものとして扱うけれど、そうじゃない」

「少しずつ違う」

「本当に少しだけだね」

「その少しが沢山になって、僕らは同じではいられなくなったんだ」
目眩がする。

ああ、悪い夢だ。

同じものは同じでなくてはいけないのに、好き勝手にどこかへ行こうとしてしまう。

「ひとつの魂で、ふたつの人生は賄えない」

「一人ずつにならないと、もうどちらも生きられない」

「アスル」

重なる声が、撫でる様にオレの名を呼ぶ。

「どうしてオレが……」

「真逆の感情を持っているから」

「愛情と、憎悪と」

「苦しいだろうね」

「さあ、僕たちを一人ずつにして」
選ぶ。

オレが？

命を。

どうして？

生きられないと、二人が言うから。

「……解った。選ぶよ」

「そう」

嬉しそうに、二つの顔が綻んだ。
だけど、とオレは懇願する。

「選べば生きられるんだろう？ 一人ずつになりさえすれば、いいんだろう？ なら、死ぬ事なんかない」

「それは……」

「許さないよ、きつとね」

「誰が！」

声を荒げたオレに、二人は跪き、宥める様な眼で見上げた。

「君が、許さないんだよ。アスル」

「一人ずつの僕たちを、君は許さない」

確信めいた口振りで、しかし責めるでもなく双子は言った。

理解できなかった。

オレの心を彼らの方が解った様に言うのが、釈然としなかった。

気が遠くなる。

そんなふうに、目の前が暗くなる。

赤黒い染みが、闇の中に現れた。幻だ。承知しながら、それに近

づく。

血だまりの中に、男が倒れていた。兄だ。

すぐ傍に、双子たちが立っている。

まるで、うつかり虫でも潰してしまったかの様な無頓着さで、血を拭う。靴の先が触れてしまいそうな近い場所に倒れたものからは、すでに興味を失っていた。

それはまるで、神か悪魔が戯れの吐息ひとつで人の命を取って行く姿に似ていた。

憧れですらない。

崇拜とでも言うべき感情で、オレは二人を許容した。

——許容？

酷い違和感に、その言葉を舌の上で転がした。

何を許す？

どうしてオレは、双子たちを許さなくてはならなかったのだろうか。ならばやはり、憎んでいたのか。

兄を奪われたために？

だとしたら、それを許せたのは彼らが手の届かない、美しい生き物だったからだ。

神でもいい。

悪魔でもいい。

人の範疇から脱け出した彼らなら、この命を取られても許せた。けれども彼らは、もうそのままではいてくれない。

闇に閉ざされた中に、双子たちの声がどこからか響く。

「知っているかい？ 死がどうやって訪れるのか」

「蒼あおざめた馬がその背に乗せて、運んでくるんだ」

「蒼は、死を運ぶ色だ」

「アスル。君の名前は、蒼と言う意味だね」

そうか。

ではオレが彼らに死を運ぶのは、当然の役目なのかも知れない。

ゆるやかに、世界が戻る。

椅子に腰掛けたオレよりも低く、床に跪いた双子たちがこちらを見上げていた。

オレは膝の上で拳を握り、それを開く。

そしてもう一度、人差し指だけを残して拳を作った。この指先を向ければ、双子たちはただのつまらない人間になり、そして一方に死が訪れる。

神ではない。

悪魔でもない。

あの日、兄を殺したのはただの人間。

ならば、命は命で贖うべきだ。

ゆっくりと、手を差し出す。

オレの背で運ばれたそれが、音もなく彼の頭こぶを刈り取る様に。

<蒼の背中／了>

無断転載不可

Copyright (C) 2009 Mikumoto / 1979.
All rights reserved.

（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。
お気づきの点、ご意見などがございましたら、どうぞご指摘頂けま
すようにお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1461i/>

「蒼の背中」

2010年10月8日13時21分発行